



春山行夫著

季節の手帳

山中 彰二

世界の文明國、大都市が始と、一年に春夏秋冬の四季の變化のある温帯地方に集中してをり、之に對して熱帯地方の民族は概して征服され、殖民地になつてゐる。これは專者のしばし指摘した處であつた。南方國を一巡して歸つて來た吉川英治氏は、四季の循環のある國のありがたさをしみん感じさせられた旨がある雑誌に記してゐる。季節は我等が漠然想像してゐるよりも遂に重要な問題である。

昨今氣候、季節又は四季、曆又は歲時記年中行事と題する著書がかなり多数出版されてゐる。筆者の手中にあるものだけでも五六十種はあらう。單簡的なものもあるが通俗的な教養書、隨筆から兒童向のもの迄ある。春山氏のこの度の著書もその一つである。國民大眾が以前よりも季節の問題に一層深い關心を有つ出した事は疑を容れない處である。だが、何が故にかやうな盛氣が調致されたのであらうか。

身處山にあつてはかへつて處山を知らない。處山を知らうと思へば處山を出なければならぬ、と謂はれてゐる。外國に旅し、外國人に反映してゐる日本の姿を見てかへつて日本の姿が一層明瞭に把握出來るといふこともよく謂はれる處である。無論如上諸説は、一般に閉却されて來た層の一面を効果的に強調したものに他ならない。物事の真相を知らうと思へば、十九世紀の文庫史を扱つたブランダースの様に、一方において對象の中にびつ込んで、一方において、他方において對象から離れて之を概観し、知識社會學者の所謂外在的考察を試みなければならぬ。こゝにおいて慣は始めて兩面共に觀察され、全體的綜合的考察が行はれたといふことが出来るのである。だが局に當るものは迷ひがちで所謂外在的考察はとかく因知されが

ちであるから、處山の説も出たのであらう。春山氏のこの度の著書もその一つである。國民大眾が以前よりも季節の問題に一層深い關心を有つ出した事は疑を容れない處である。だが、何が故にかやうな盛氣が調致されたのであらうか。身處山にあつてはかへつて處山を知らない。處山を知らうと思へば處山を出なければならぬ、と謂はれてゐる。外國に旅し、外國人に反映してゐる日本の姿を見てかへつて日本の姿が一層明瞭に把握出來るといふこともよく謂はれる處である。無論如上諸説は、一般に閉却されて來た層の一面を効果的に強調したものに他ならない。物事の真相を知らうと思へば、十九世紀の文庫史を扱つたブランダースの様に、一方において對象の中にびつ込んで、一方において、他方において對象から離れて之を概観し、知識社會學者の所謂外在的考察を試みなければならぬ。こゝにおいて慣は始めて兩面共に觀察され、全體的綜合的考察が行はれたといふことが出来るのである。だが局に當るものは迷ひがちで所謂外在的考察はとかく因知されが

幾多ある類同の刊行物の内でも春山氏の著書はかなり異色あるものである。全體を春夏秋冬の四部に分け各部にそれ／＼關係のある自然景物を配してゐる。氣象や動植物が重要な目であるが、タイプライター、鐘聲等も面白く扱はれてゐる。著者の言葉によれば、本書は雑誌に發表したものを集積加筆したもので、専門的な立場からでなく、一人の自然愛好者、文化史の讀者の在り方に於いて、勤勉に記録したものである。個々の部分についてそれ／＼の専門家にはもつと吟味したらと思はれる處もある様であるが、併し季節現象を文學、美術、自然科學、文化史等あらゆる視野から瞥見することは、何人も調及し得る處である譯ではない。冬の景物としての林檎を脱くに

著者は世界で最も有名な四つの林檎、即ちイヴがエデンの楽園で食べた林檎、ウイリアム・テルが弓で見た事に射通した林檎、萬有引力の法則の発見の手がかりとなつたニュートンの林檎、セザンヌの描いた林檎から説きおこし、その名産地に及んでゐるところなど、頗る興味深いものである。季節のことについて氣象學層學の上から考察してゐるのは無論であるが、又文字學語源學の上からも東西のことに疎々ふれてゐる。支那關係の資料が少し手薄ならみ本なくもない様である。近年歐米で盛に研究されてゐるフェノロギーの如きは支那において古くから例へば二十四季節七十二候において、或ひは程羽文の月令讀、花暦、一歳芳華、張騫の貧心貧事、張潮の花鳥春秋その他において考察されてゐる。近くは氣象學者笠可植が「新月令」を論じてゐるが、この方面のことは近代の西洋の學者の研究と對照しても實に異色あるものであると思ふ。著者が今後續筆即豫定の層及季節に關する論者において大にこの方面の資料を活用することを希望する次第である。

る。

よくデパートと問屋との対比がなされる。前者は各部門のものが全部がひと通り備つてゐるのに對して後者はある部門に限り、それに關係するもの全部を備へるものである。普遍的教養と専門的研究は各々その特色と意義とを有するものであるが、いづれにしてもその一方にのみ偏すべきものではない。専門家はその視野を廣くすることによつて絶大な便益を受けるものである。この意味においても泰山氏の改書は意義あるものであると思ふ。(昭和十九年八月、東京社發行、四六版二九七頁、定價金二四十二錢)

須藤利一先生の

「南島叢書」を讀む

國分直一

須藤先生は私にとつては高等學校時代の恩師である。文科に精を凝らした私は直接先生のお講義を聞く機會はなかつたが、探検中に燃えた先生の御勉強ぶりは、徒に模範的にさまよつてゐた當時の私たちを強く刺激して下さつた。そしてさうした先生

からの刺激はその後、「民衆教育」の運動や、「南島」の研究を通して長く今日に及んでゐる。

沖繩に關心をもち、沖繩を理解し沖繩を探究する人は今日では決して少くはないが、須藤先生はさうした人たちの中であつて、最も優れた沖繩への理解者であり、又探究者の一人であらうと思ふ。

先生は「南島」の編輯者として沖繩に於いての啓蒙的な仕事を續けられてきた以外に、これまでには尙、ベジルホルの大琉球航海記の翻譯も世に出されてゐる。そして今また「南島叢書」を世におくられ、先生が如何に深く沖繩を愛し、又探究されつづけたかを概観するには、實はこんど出された「南島叢書」によるのがもつともよいと思はれる。

内容は紀行篇、雜記篇、數學資料篇にわけられてゐる。先生の沖繩への最大の關心は教學資料の探究にあられたやうである。そのことは序文に於ても云つておられるし、又直接お話をうかがつたこともあつた。紀行篇はさうした資料が如何にして探究されたかについて

の記録である。雜記篇はこの探究への過程に於いて得た遺章の所産であるといはれてゐる。

簡単に内容をあげると、數學資料篇は「封建社會の數學」「精細の語彙」「與那國の「ペラザン」「カイダー」學」と及び「家判」「すうちうま」「琉球の算法書」の諸篇から成つてをり、美しい寫眞版こそへて、琉球數學の全貌が窺はれるやうに配置されてゐる。

あと十年もせぬ中に、恐らく全く跡を絶ち忘れられてしまふであらう數學史上の資料が採集網羅されたといふことは、たゞそれだけでもまことに貴重なお仕事であつたといへやう。

たゞその範圍が殆んど八重山に限定されてゐるので、將來もつと廣い範圍にわたつて探究するといふ點に先生の今後のお仕事の一部分があるであらうと思ふものである。紀行篇はさきにもいふ如く數學資料探究のための先生の旅行記である。「八重山雜記」「與那國島紀行」「八重山の熱利祭」の三篇をおさめてゐる。